加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修

加子母むらづくり協議会［岐阜県中津川市］

団体設立の経緯

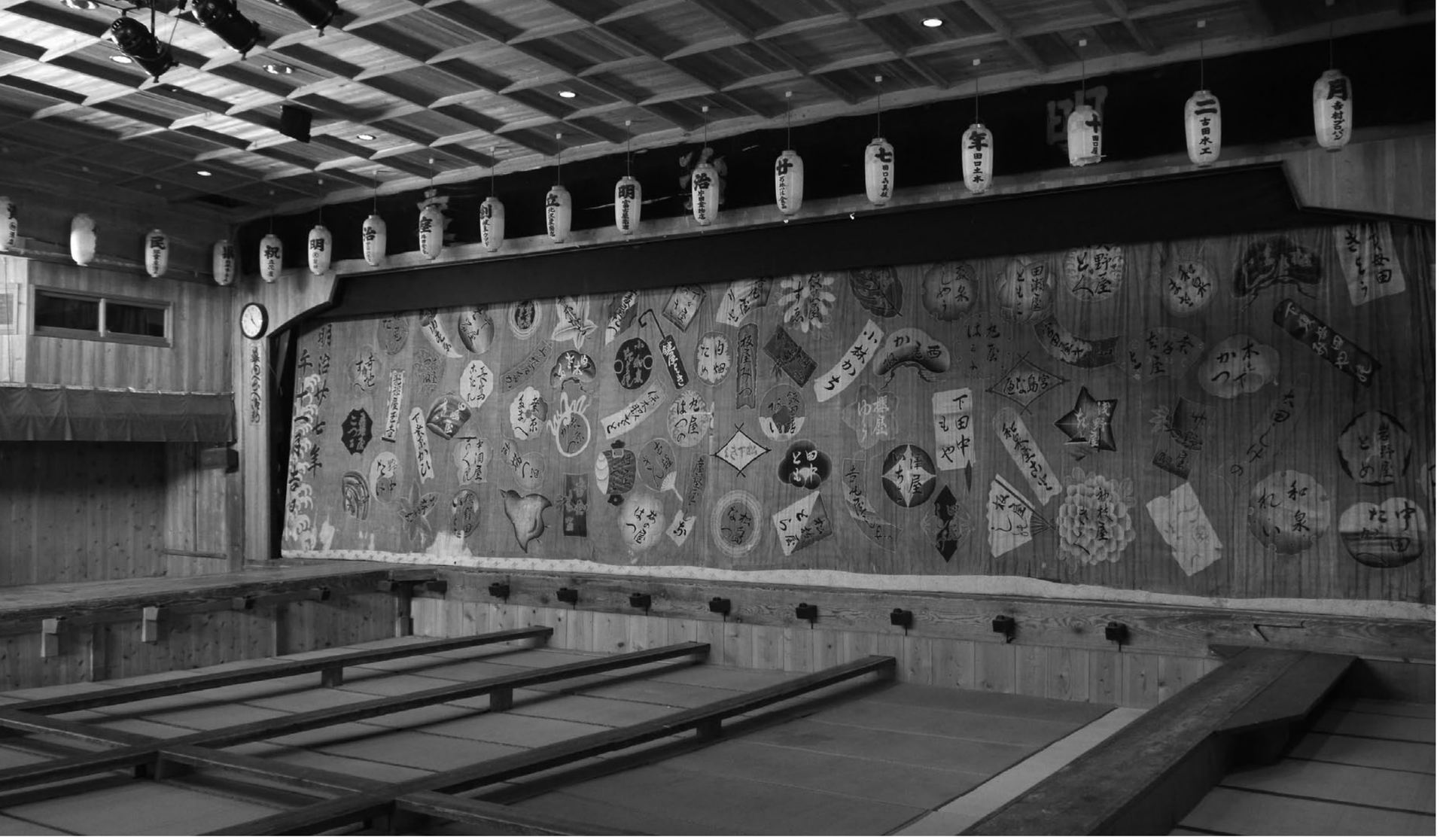
加子母地区（旧加子母村）は、岐阜県中津川市の最北端に位置しており、平成17年2月に市町村合併により加子母村から中津川市に編入合併しました。市町村合併後は、合併特例法による地域審議会を経て地域づくりの検討を進めてきましたが、平成23年7月に全世帯が参加・協力して地域の自立を目指すために「加子母むらづくり協議会」を発足させ、平成27年2月には「NPOかしもむら」として法人化を図り、持続可能な地域づくりに向けて本格的に活動を展開しています。その活動のひとつとして、地域の山村文化の象徴である農村舞台「明治座」があり、伝統芸能である加子母歌舞伎や明治座クラシックコンサートなどを通じて、都市と山村の交流を深めてきました。また、今年度で20年目を迎えた大学生を対象にした木造建築セミナー「加子母木匠塾」の活動も広がりを見せており、地域と大学との連携による「加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修」プロジェクトがスタートしました。

地域概要

当地区は、伊勢神宮式年遷宮に用いられる御神木の里としても知られており、江戸時代には徳川御三家である尾張藩の飛地領であった歴史もあります。
「明治座」は、村の人々の寄付と労働奉仕によって明治27年に建設されました。当時は全国的に村芝居の全盛期で、近隣だけで70軒もの芝居小屋が建てられました。「東濃の村芝居と西濃の花火は県下の二大病」とも言われ、若者が仕事を放りだして熱中するので新聞などで猛烈に非難されたほどでした。大正時代の不況などの影響でそのほとんどが姿を消していき、明治座も何度か取り壊されそうになった時期もありましたが、関係者の努力で回避されてきました。
明治、大正時代は劇場として旅芸人一座の興業や青年団による弁論大会等、村人の娯楽の殿堂として活躍しました。戦争中は軍需品の倉庫として利用された時期もありましたが、昭和22年「明治座保護会」が組織され、荒れ果てていた建物が修理され、以来毎年秋には、地元の役者たちによる加子母歌舞伎が演じられています。

設立年月 ･･･2011 年 2 月
法人化した年月 ･･･2015 年 3 月
メンバー数 ･･･988 世帯
代表者名 ･･･ 中島紀于（なかしま・のりお）
連絡先 ･･･ 〒508-0421　岐阜県中津川市加子母 3519 番地 2
☎ 0573-79-2111　kashimo-office@city.nakatsugawa.lg.jp
団体のミッション ･･･ わたしたちは、加子母地域の自立を目指し、これまで受け継がれてきた豊かな資源を守り、子々孫々に至るまで真の豊かさを伝えていくことを目的に活動を行っています。

加子母木匠塾が明治座の改修現場を見学しています。伝統構法について理解を深めながら、地域各地で行われる木造実習の活動へと繋げています。



活動に至った理由や背景

明治27年の創建から120年を経た明治座は、老朽化により雨漏りや屋根・床の不陸などの傷みが著しく、地域ではその活用と維持保存に不安を募らせていました。そのような中で、一昨年から地域と大学との連携事業により、加子母むらづくり協議会と建築構造学や文化財保存などの研究者を交えて調査と検討を重ねた結果、一般的な耐震改修に用いられる鉄骨などでの補強ではなく、明治座の持つ素朴な芝居小屋としての雰囲気を損なわないように伝統構法を最大限に駆使し、創建当時のままの板葺き石置き屋根への復元に着手することになりました。この復元工事により、明治座の文化財としての魅力はさらに高まることが期待されますが、重要なのは伝統的な木造建築技術や、既に失われつつあった屋根材を製作するための板へぎ技術を、如何にして次の世代につないでいけるかであり、それが今回の大きなテーマとなりました。

「明治座保護会」へのインタビュー風景。明治座の歴史と伝統を残し伝えるために、大学生が記録映像の作成に取り組んでいます。

ラボ通信

地域全てがキャンパス

交流と学び 実践

域学連携研究所「加子母Lab」主宰
名古屋工業大大学院2年 佐野智哉さん 23

1894年（明治27年）に建築された岐阜県中津川市加子母地区の地歌舞伎小屋「明治座」。10月の完成に向け、改修中の明治座を志田肇・同県知事が先月27日、視察に訪れた。関係者に工事の進み具合などを訪ねるその姿を、佐野さんがビデオ収録していた。「加子母に欠かせない明治座。完成までの映像はテータとして不可欠です」

加子母地区は、中津川市の山あいにある林業が盛んな地域。高齢化と過疎化が進む里山で、学生たちが1995年から、地元の工務店などでつくる「かしも木匠塾」で木造建築の基礎や技術を学び、明治座で秋に行われるクラシックコンサートに参加するなど、地域と大学が協力し合う「域学連携」が早くから実践されていた。

こうした現場から佐野さん＝写＝が、加子母全体を大学のキャンパスととらえ、「加子母大学」と命名。自ら暮らす加子母の家を第1号のサテライトキャンパスとして、域学連携研究所「加子母Lab」と名付けた。明治座の記録を残したり、学生と地域とのネットワークづくりに励んだりしている。

□域学連携　地域と大学が協力しあって地域活性化や、まちづくりなどに取り組む。職務を推進する事業で、地域では大学に集積される知識や情報、ノウハウが生かされるほか、地域で不足する若い人材の活用つながるメリットがある。大学でも実践の場が得られるほか、教育・研究へフードバックできるなどの利点がある。

建築デザインを専攻していた佐野さんが加子母地区を初めて訪れたのは、大学生だった2年前の5月。在籍していた研究室に「域学連携」という研究課題が設けられたのがきっかけだ。

佐野さんが加子母を訪れて驚いたのは、住民に根付いた地域コミュニティーだ。6月の第1日曜日は「環境デー」として、地区人口の半分にあたる約1500人が国道257号沿いで花を植えたり、「普請」と呼ばれる会合で住民が交流を深めたりと、「都会では希薄になりつつあるコミュニティーが当たり前のように残っていた」という。

佐野さんは、大学の卒業制作で「加子母大学」の模型を作った。学生が参加する木匠塾や明治座など地域全体を学びの場として設定。先生は地域住民、学生は林業や農業、歌舞伎など教えてもらいたい住民のところへ通う。老朽化した公民館を改築して図書館にしたり、神社を大学のホールとして活用したりするなどして、大学としての機能も備えさせた。

「域学連携」に取り組む佐野さん

■　□

大学院に進んだ後、昨年8月から、加子母に空き家を借りて、週5日加子母、残る2日を名古屋という生活を始めた佐野さん。今年1月から、名古屋との「二重生活」をやめて本格的に加子母に移住した。

翌2月には、市加子母総合事務所の協力も得て、域学連携の報告会「加子母大学オープンキャンパス」を開催。雪の山道散策や、炭作り体験のほか、かしも木匠塾に参加した京都大や金沢工業大、明治座の舞台道具の製作に携わった武蔵野美術大の学生らの活動報告会を行った。

今後、仲間を増やしていくことが目標という佐野さんは「田んぼや畑、森で学生と地域住民が交流しながら学び、協力していくことで、地域活性化に役立てば」と話す。〈松原輝明〉

活動の内容と成果

明治座の改修は、これまで地域が取り組んできた地域と大学との連携事業が発端となり、明治座の文化的価値を高めることと、失われつつある伝統技術の継承を目的に、取り組んできました。そのなかで、名古屋工業大学大学院に通う佐野智哉君（23才）が、加子母地域に住居を移し、加子母木匠塾をはじめとする大学生と地域を結ぶ役割を担うようになりました。8月には「加子母LAB」を設立し、明治座改修に関連する活動を行い大きな効果を生み出してくれました。以下、彼が「かしも通信」という地域広報紙に掲載したレポートから、本活動内容をお伝えします。

岐阜県重要有形民俗文化財である明治座は、創建から120年が経ちました。この大木造建築の柱はひしゃげ、梁はたわみ、虫食い腐れが各所に見られます。この木造建築を後世に残すために、地域は何をしなければならないのでしょうか?

今年度、平成の大改修が進められる中で、地域と大学が協力し試行錯誤を繰り返しながらも、多くの関わりや広がりが生まれてきています。今回、明治座を次の100年へと繋いでいくために、平成の大改修と並行して動き始めつつある活動について記したいと思います。

昭和の大改修―屋根の葺替え

明治27年、地元住民がお金を出し合い、材料を山から伐り出し、汗水流して建てられた明治座。時には、雨漏りを防ぐために屋根替えをしたり、天井を張ったり、多くの人々の手によって、明治座は現在まで守り続けられてきました。昭和48年の屋根の葺替えは、住民が協働で行い、写真にもその様子が残っています。

今回の大改修のポイントは、屋根がセメント瓦葺きからトントン葺き（榑葺き）に変わることです。40年前も、みんなが集まって作業してきたように、またみんなで屋根の葺替えができたらと思い活動を進めています。

平成の大改修―トントン葺きへ

起工式

「まだまだやらなきゃならんことがたくさん残っておる。」

12月11日、明治座改修工事 起工式の挨拶で明治座世話人代表の熊澤和之さん（76才）がそのようなことをおっしゃっていました。

起工式自体は30分ぐらいの短いものでしたが、明治座の独特な空気に包まれる中、集まった皆さんも同じ気持ちだったのでしょう。「みんなで守り、多いに活用していきたい。」「建物は良くなるのだから、中身ももっと活用していきたい。」というようなお話を伺いました。

また、明治座の顔として管理人を続けてきた安江智夫さん（79才）は、「こういうふうになるとは思わなんだ。本当にとってもありがたい。1日でも早く完成してオープニングのことを考えたいと思っている。」と語ります。

明治座の姿がこれから先100年200年と続いていくためには、みんなで守り、みんなで考えていく必要があります。

地域と大学生たちの繋がりを深めるためにも地域の広報誌である「かしも通信」や工事記録を残す「明治座記録映像」により、工事の様子を発信・議論する中で、次の活動へとつなげています。

青年文化発祥の場

平成26年度も、5月にはクラシックコンサート、8月は加子母木匠塾、9月は加子母歌舞伎が行われ、加子母じゅうで地域と大学が連携した取り組みが行われました。

その中で、平成27年2月21日には域学連携活動報告会「加子母る大学オープンキャンパス」が開催され、山仕事や歌舞伎舞台づくり、古民家改修コンペなど6つものイベントを行いました。

翌日には「山村文化の継承とこれからの地域づくり」といったシンポジウムも開催され、その中で明治座は「青年文化の発祥の場」であったことが伺えました。かつて明治座では、歌舞伎だけでなく青年団の主張大会や演劇、バンドなど若者たちによる多くの活動が行われ、その過程で

常に手が加えられ守られてきました。現在の若者たちとの連携も、明治座が文化を創造してきた延長線上にあるのだと感じます。

今年度も加子母木匠塾を中心に明治座改修工事の見学会や板へぎ体験など、次世代へとつないでいくための取り組みを行っています。

120 年の歴史をつなぐ

3月7日は、改修工事が進む中でセメント瓦が一気に取り外され、その下に眠っていた「トントン葺き（榑葺き）」が姿を現しました。明治座内部に入ると床板が取り外され、「石場建て」としての姿を見ることができます。石の上に一本の柱が立ち、大きな屋根を支えている明治座の骨格を目の当たりにし、これまで支えてきた偉大さを感じます。

このように今回の文化財としての修理工事は、床や屋根、壁などを一度取り外し、腐食部分の修復をしていきます。その後、板を一枚一枚、元の位置に戻していくため、屋根はガラッと変わるものの、内部は何も変化がなかったかのようになります。

工事中の明治座は、まるで解剖されているような状態であり、これまで地域住民の手で修復されてきた痕跡を一望することができます。そこで、この状態をみなさんに見てもらいたいと思い、地域住民向けに見学会を開き、定期的に見学する機会を設けています。

トントン葺き（榑葺き）に向けて

明治座では、大工さんや左官屋さんなど職人さんたちが修復工事をしていますが、トントン葺きに向けては、加子母のあちこちから地域住民が集まり、試行錯誤しながら板へぎを行っています。

3月24日には、へぎ板の製造に取り組んでくれている木工所や林業グループの方など約20名で、高山市にある飛騨民俗村・飛騨の里を訪れました。そこでは、県内で最後の板へぎ職人 山口末造さん（90才）に、数年ぶりに板へぎ

の実演を行ってもらい、どんな技術や道具を使っているのかじっくりと見学しました。

しかし、道具が足りなかったり、板へぎが初挑戦であったこともあり、なかなか一筋縄でいきません。さっそく加子母じゅうの家をまわって、かつて使われていた板へぎ道具（両刃のナタ）を探し出したり、みんなで話し合いながら、山口さんに学んだ技術を実践していきました。

トントン葺きへの道のりは本当に大変だと感じますが、いろいろな人が集まり乗り越えていく過程には、多くのエネルギーや熱意が込められ、知恵が集結し、技術が継承されつつあると感じます。

また4月1日には、山口さんが明治座見学に訪れ、後に届いたお手紙には「立派なものに仕上げ、長持ちする技術を伝えたい。自分が経験した技術をすべてお話しし、後世に残してもらえたら」と、書かれていました。

今回の明治座工事により、屋根が瓦葺きからトントン葺きに変わることがいいことか？　加子母地域内でも、メンテナンスや維持管理のことを考えると賛否両論です。しかし、事実として一人の職人さんが元気になり、すべてのことを伝えたいとまで思っています。このことからも、明治座は単に修復を行っているだけでなく、伝統や文化、技術を継承していく実験を行っている真っ最中だと感じます。なんとかこの知恵や技術を継承し、生業として定着していけたらと思います。

今後の予定

明治座維持補修基金

明治座の保存修理工事は今秋完成し、11月には加子母歌舞伎のこけら落とし公演が行われます。今年で、12年目を迎えた武蔵野美術大学と連携した加子母歌舞伎の舞台演出はこれからも続けられ、同様に21年目を迎えた加子母木匠塾の活動も続いていきます。

今回復活するトントン葺きは、少なくとも30年に一度は葺替えが必要になります。そのためには、技術の継承はもちろんのこと、屋根材となるクリ材の育成や資金の確保が大きな課題です。今回の改修にも、平成14年から「明治座維持補修基金」として、1口300円で寄せられた寄付金約2,000万円が活用されました。今後もさらに明治座を維持していくための資金確保に向け、実際に屋根材として使わせていただく「へぎ板募金」の取り組みも始めています。

明治座改修の広がり

「明治座 平成の大改修」は、もう一度地域の人々と明治座との関わりを紡ぎ出す転機となり、新たな可能性が多く生み出され、試行錯誤を繰り返しています。その中で生まれつつある活動としては、

木の文化を活かした生業づくり

- 多種多様な森づくり
- 適材適所の家づくり
- 板へぎの技術継承
- 木匠塾を通じた伝統構法の継承

明治座を活かした地域づくり

- 維持保存のための樽板募金
- 自主運営に向けた組織の強化
- 地歌舞伎の振興

地域と大学が連携した拠点づくり

- 加子母通信や記録映像などの情報発信
- 加子母 LAB 設立と木匠塾 古民家拠点の整備

これまでも明治座があるから活動が継続し、活動があるから明治座が残り続けてきたように、新たな活動や関わりを育む中で、次の100年へ向けた取り組みを模索しています。